



[講演]

『言語と文化現地研修』 プログラムにおける 日本語教育

観光学部教授
豊田 三佳 氏

○豊田 豊田です。よろしくお願いいたします。観光学部は、実はタイトルにあります、「言語と文化現地研修」というプログラムを、この日本語教育センターができるよりずっと前から、実施してきました。その経緯と、その中でどういうふうに日本語教育が位置づけられているのかをお話していきたいと思います。【スライド⑤-1】

きょうの発表の流れといたしましては、まずその観光学部の国際化の取り組みとしてどういう科目があるのか。観光学部の学生が海外に行く、あるいは海外の学生を受け入れるための科目群の中に、言語と文化現地研修という科目があります。その設置経緯と特徴などを述べながら、その科目の中でどういう形で日本語教育センターと関わっているのかという話をしたいと思います。【スライド⑤-2】

特にこの「言語と文化現地研修」というのは、これは派遣側の、日本人の学生が海外に行く場合は「言語と文化現地研修」という名前をつけておりまして、それに対して、同じ協定校から受け入れるというのが招聘科目で、「日本文化体験プログラム」と呼んでいます。この「日本文化体験プログラム」の中で日本語コースが開催されております。

では、まず観光学部の海外派遣科目関係のことをちょっと簡単にお話していきたいと思います。初年次の段階では、「早期体験プログラム」というプログラムがあります。これはそれぞれの先生方が自分の専門を生かし、実際に現場でどういうふうに観光がなされているのかを（現場体験する）導入科目です。現場体験を早いうちに積んでおかないと、実際に大学の学校、教室の中で学ぶ内容がど

ういう意味を持つのがわからないという状況が生まれますので、まず現場体験をしてみる。これは全員が体験するわけではなくて選抜という形ですが、合計で大体110名ぐらいが参加して毎年行っています。それぞれの先生が、例えば今年は世界各国に9コース設置され、それぞれの教授が1週間程度連れて行きました。

その中には、学部間協定を持っている大学のある国に行くこともありまして、その場合は学生交流のプログラムを行ってみたり、あるいは、実際にそのフィールド調査をしてみたり、そういうことを行うのですが、これを実施するのが初年次です。

2年次に行うのが、「言語と文化現地研修」という形で、これは派遣プログラムなんですけれども、先ほどの1週間なのに対して、今度は2週間のプログラムです。この場合は、引率教員がいません。協定校の大学に送って、その協定校の先生方、そして学生の方々と、実は向こうの学校で寮生活をするとちょっとミニ留学的な感じのプログラムになっています。このプログラムは、相互の教育プログラムになっておりまして、その派遣に対して、それぞれの協定校からの招聘も行っています。ですから、この形で2週間、それぞれの協定校から学生が立教大学に滞在しているという形になります。どういう協定校と今それを行っているかというのは、この後のスライドで説明しますが、そういう協定関係にある学校と、2週間送る、2週間受け入れるというものがあります。それから、それぞれの先生が海外の合宿、演習の中、ゼミの中でも実習をするということもあります。

そういう体験を通じて、今度はもうちょっと長く行きたいという学生たちが交換留学という形で、半期あるいは通年で行っております。この通年、あるいは半期で行く交換留学は、もちろん学部間協定校に行く人もいますし、あるいは学部間協定校に行く人もいます。それ以外にも、休学留学をとって、日本語をその国で、実は今ちょうど私のゼミ生もいるんですけど、例えば、インドで日本語を教えるようなボランティアをしながら1年間過ごすとか、あるいは、インドネシアに行くとかいう学生たちも出てきています。ちょっとそのことも組み合わせて後でお話ししていきたいと思います。【スライド⑤-3】

では、具体的に学部間で協定校を持っているところはどこかという、いわゆる欧米の国は、立教大学の大学レベルでたくさんありますので、どういう大学と

提携を結んできたかという点、それぞれの国において観光学に非常に力を入れている大学と協定を結んできています。例えば、中国の中山大学などは観光学部においては、恐らく中国の中でトップクラスだと思います。また、ベトナム国家大ハノイに関しても、ベトナムの中で観光学で博士課程を持った最初の大学になります。そういう形で、協定先の大学を選んできております。

少しずつまたこれから増やしていくという形になりますけれども、この2018年秋からは、やはり英語圏のところで観光学を学べるところにも行きたいという要望が今出てきておりますので、そういう大学もこれから増やしていく可能性もあります。

ここでちょっと赤で記してあるのが、この「言語と文化現地研修」、先ほど言った派遣の2週間、そして受け入れの2週間を実際に提携して行ってるのが、これらの大学になります。**【スライド⑤-4】**

その「言語と文化現地研修」の派遣と受け入れを2週間、学生の受け入れと派遣を行っているところがどういう形で発展してきたかというので、細かく話していると時間を取られますので、簡単にざっくり言うと、2007年の時点でアジア人財資金構想を受託しています。その時点で、日本語教育の専門家が必要だということで、日本文化体験プログラムが作り始められた。でも、その時点ではまだ日本語教育センターというのがなかったので、自前で日本語教員を手配しておりました。**【スライド⑤-5】**

そして、この2007年以降、少しずつその学部間協定を増やしていき、その成果プログラムを定着させていくという形になって、そして2014年から初めて日本語教育センターの兼任講師の方に合計8コマ相当ぐらいで、その「日本文化体験プログラム」の講師を依頼するというのが始まったのが2014年ですね。だから、2007年以降の段階ではずっと自前でやってきて、2014年から日本語教育センターとの交流が始まったという形です。

ちなみに、観光学部というのは新座キャンパスにありまして、立教といたら、みんなこの池袋にあると思って新座キャンパスはほとんど忘れられている存在なんですけれども、そこにあります。

それで、2015年あたりから、この「言語と文化現地研修」ということで科目を一本化しておりまして、その以前に「言語と文化」という形で、いろいろな形で言語系のものはあったんですけれども、それを閉じて、もうすべて「言語と文

化現地研修」というカリキュラムの中に、一本化してきました。【スライド⑤-6】

この「言語と文化現地研修」の大きな特徴としましては、先ほどから繰り返しておりますけれども、これらの協定校との相互派遣プログラムということですので、その協定校学生が来たときに、観光学生が1対1のボディのような形で、学生が主導となって一緒に面倒を見合って、自分たちも行ったときには面倒を見てもらい、向こうが来ているときには面倒を見てあげるという形のプログラムになっております。

立教生が向こうに行ったときには、現地学生とともに学生寮で生活するということですので、例えばタイのタマサート大の場合は、実は生活圏もというか、部屋をシェアするぐらいの、密着した形での生活になってきます。その中で、タイ語を学んだりベトナム語を学んだりする科目、あるいは、フィールドワークという形で実際に現場で調査をする。そして、課題がありますので、そのレポートを書くためにいろいろな調査を向こうでするんですけども、それもそのボディの学生と一緒に行動するというのが基本になります。これは2週間の現地研修のプログラムです。

私たち教員は、向こうの受け入れ先の大学と非常に密に連携をとっているんですけども、その2週間はそれぞれ受け入れ先の大学の先生にお任せしている形になります。

受け入れに関しても派遣に関しても JASSO という奨学金制度を申請しており、参加する学生たちの経済的負担を軽減しています。私たちの1つの大きな事は、この JASSO の奨学金をなんとか頑張って獲得することで、そうしたら向こうからの受け入れの学生もぞくっと増えるという形で、例えば、昨年度、中山大学の場合は、JASSO が受かったということで20名の学生が来るということで、規模的にはそんな感じになりますね。もちろんこの奨学金が取れなかった場合は、ちょっと人数が減ってしまいますけれども、それでもやっぱり来たいという学生はいます。【スライド⑤-7】

受け入れの2週間のプログラムの中で、日本語クラスを今、大体8コマぐらい入れております。それ以外にも、実際に立教大学の学生の人たちと交流できるようにゼミに参加することにありますし、あるいは特別講義という形で、その人たちに、やはり講義をすべて日本語でしてしまったらわかりにくいところもありますので、英語の講義を入れて、例えば、こういう交流スタディツアーに連

れて行く前に、先ほど東條先生のお話にも出てきましたけれども、例えば川越旧市街に行く前に、その歴史的な背景とか文化的な背景とか、そういう説明をまずして、それからスタディツアーに行くということになります。

この交流スタディツアーは、教員も同行しますが、教員の役目は同時に、チェックポイントでの確認ですが、基本的にはバディと2人、あるいは3人を組にして、この地点で何時にはここでチェックポイント、チェックポイントみたいな形で、学生たちで鎌倉のことを調べ、そこに留学生を、外国人の学生をどうやって連れて行って、どうやって説明するのか。そういうことが重要になってきます。

観光学でこれからインバウンドが増えるということもありまして、自分たちの文化、あるいは社会をどういふうに具体的に説明していくのかが必要になりますが、「言語と文化現地研修」の事前授業というのは、結局、この「日本文化体験プログラム」の準備にもかかわってくるという形になってきます。だから、学生たちが到着する前には、例えば富岡製糸場、世界遺産になったけれども、結局一体何なんだろうという。日本人学生も実は知らないもので、それをちょっと調べて、どうやって英語で説明したらいいのかっていうことは考えるというところで、それで、滞在しているときには新座キャンパスの太刀川記念交流会館に滞在してもらうというふうになっております。**【スライド⑤-8】**

こういう形で行われているので、実は時期的には、まず日本に来てもらうのが先です。ですから、自分がこれから行く国の人に来て、しかもその大学でお世話になるであろうと分かっている人が来ているので、学生たちはもう本当に一生懸命、バディをしてくれます。

それで、ツアーにも参加しますし、それからこの日本語の授業にも一緒に参加するという形になっております。

先ほどちょっと丸山先生がお話ししましたけれども、日本語クラスと一緒に参加してどうやって日本語を学んで、どういうふうにそこで説明していくのかというところで、完全に日本人もかかっているという形です。その意味では、非常にチューターの学生が積極的だと思うんですね。それと、この相互プログラムであって、自分の必要性もあるということで、向こうでお世話になるということがわかっているんで、やはり皆さん、時間を費やすのですけれども、1つちょっと問題ではないんですが、あまりにも熱心過ぎて、自分が実際に取っている授業を休んで、その2週間の間にそっちに参加しちゃうという学生も出てきました。

今後は「言語と文化現地研修」を履修してる学生以外も参加できるようにオープンにして、バディ（チューター）の役割を回すという形にしたほうがいいかなと考えています。

その1つの提案として、ちょっと今考えているのは、一番最初に言いましたけれども、私のちょうどゼミの学生でも、例えば、休学してインドや、インドネシアで日本語教師をやりたいと考えている学生がいて、そういう学生たちがボランティアで今かかっているだけですが、もしも日本語のチューターとして何かかかったことが何らかの形で単位になるとか、日本語教師の初歩を学ぶことが可能ならば、実際にとてもいい機会ではあると思うんですね。本当に学びはあるし、自分も違う言語を学び、ほかの言語を学ぶ人がどうやって学んでいくのか、どういふところでつまづくのかを見ながらやっていくので、そういう連携ができれば、非常にありがたいかなと考えています。これが1つの提案になります。【スライド⑤-9】

最後、課題というところで、先ほどもダイバーシティとか、インクルーシビティとか出てきたんですけども、その日本語クラスで、マラヤ大学というのはマレーシアからの大学で、ほとんどの方々がイスラム教徒なんですけれども、その方々への日本語のクラス中であったエピソードを紹介します。日本語教師の方々がイスラムのことについて、それほど知らない可能性もあります。観光学の学生は文化的・宗教的タブー、例えば、イスラム教徒にとって豚肉を食べるとするのは宗教的にタブーなんだよということは、多分、1年生のときから聞かされているけれども、「あなたは豚肉を食べますか」というような例文が日本語クラスの中で出てきて、一緒にいた学生が、逆にちょっとびっくりしてしまったというような事例がありました。それで、こういうチューターの学生が違和感を表明して修正されたということでした。考えてみると、イスラム教への理解はまだ不十分で成田空港とかで礼拝をする空間ができたのも非常に最近です。

私は立教大学で働く前に、シンガポール国立大というところで10年ほど働いていたんですけども、そこでは、例えば、学生食堂で、使った後のお皿を返すところも、ハラル用とハラルじゃないところが分かれています。それぐらいにセンシティブなものなんですね。その豚肉を扱った食器を混ぜてはいけないぐらい、それぐらいなので、この「豚肉を食べますか」という例文にはちょっと驚いてしまう、みたいな感じがちょっとありました。その辺はお互いに学び合っている

ところかなと思っています。【スライド⑤-10】

以上です。

○丸山 ありがとうございました。幾つかの課題と、それからこれからの可能性についてお話しいただきましたので、後でまたディスカッションのときにお話しできればと思います。どうもありがとうございました。

それでは、続けて池田先生のご報告をお願いしたいと思います。

【スライド⑤-1】

日本語教育センター主催公開シンポジウム
大学の国際化と日本語教育-発展的で持続可能な学部・研究科との連携を目指して

「言語と文化現地研修」プログラムにおける
日本語教育

観光学部教授 豊田 三佳

1

【スライド⑤-2】

発表の流れ

- * 観光学部の国際化と科目
- * 『言語と文化現地研修』設置の経緯と特徴
- * 招聘科目『日本文化体験プログラム』

2

【スライド⑤-3】

観光学部の海外派遣科目

- 初年次
 - 「早期体験プログラム」: 派遣、引率教員あり、1週間以内
学部間協定校訪問、学生交流プログラムを含む
- 2年次～
 - 「言語と文化現地研修」: 派遣、引率教員なし、2週間
協定校からの招聘「日本文化体験プログラム」
 - 演習の海外合宿
学部間協定校訪問含む
- 交換留学
 - 半期、通年
学部間協定校。全学は通年のみ

3

【スライド⑤-4】

観光学部協定校一覧

「早期体験」・「言語と文化現地研修」

- 中山大学(中国)
- マラヤ大学(マレーシア)
- タマサート大学(タイ)
- インドネシア大学
- ベトナム国家大ハノイ
- ハワイ大 Travel Industry Management
- 漢陽大学(韓国)

交換留学のみ

- * 南京大学
- * 北京外国語大学
- * 韓国外国語大学
- * モンゴル国立大学
2018年秋より(予定)
- * セントラル・フロリダ大
- * エセックス大

4

【スライド⑤-5】

『言語と文化現地研修』の設置経緯

- 1998年度
 - 大学教育研究部から英語、フランス語、ドイツ語など主に言語科目担当の教員が分属
 - 学部専門科目『言語と文化』開講
 - こうした方々が学部科目を持てるよう観光学部新設時に開講
 - 言語系科目だが、学部科目ということで、半期1単位でなく2単位
- 2006年度
 - 交流文化学科開設
 - 当時の稲垣勉学部長のアイデアで『早期体験プログラム』正課外運営開始(2007年度から正課に)
- 2007年度
 - アジア人財資金構想受託(～2012年度)
 - 学部で日本語教育専門家を特任教員として雇用
 - 『日本文化体験プログラム』も当初は自前で日本語教員を手配

5

【スライド⑤-6】

『言語と文化現地研修』の設置経緯

- 2008年度
 - 学部間協定校増えたのを機に、『言語と文化』海外版として、マラヤ大、ベトナム国家大で『言語と文化現地研修マレー語』『言語と文化現地研修ベトナム語』を正課外プログラムとして開始
 - 国内正課開講『言語と文化』にマレー語、ベトナム語を加えるが、『言語と文化現地研修』の先修科目とはせず
 - 言語Bにないアジア諸語を学部科目で開講する試み
 - 主に協定校からの派遣教員による集中開講
- 2010年度
 - 『言語と文化現地研修』に英語(ハワイ大)、タイ語(タマサート大)を加え、正課に
- 2014年度
 - 日本語教育センターに兼任講師相当単価で『日本文化体験プログラム』講師派遣依頼
- 2015年度
 - 『言語と文化現地研修』として科目を一本化し、開講科目数をスリム化
- 2016年度
 - 新カリキュラムに国内開講の『言語と文化』を含めず(2018年度終了予定)

6

【スライド⑤-7】

「言語と文化現地研修」の特徴

- * 協定校との相互派遣プログラム
- * 協定校学生と観光学部学生の1対1バディによる学生主導プログラム
- * 現地学生と共に学生寮で生活
- * 引率教員なし
- * 2週間の現地研修
- * JASSO海外留学支援制度(受入・派遣)に申請し、参加学生の経済的負担を軽減

7

【スライド⑤-8】

「日本文化体験プログラム」の内容

- * 派遣科目「言語と文化現地研修」の相互交換プログラム
- * バディ学生との交流スタディーツアー(鎌倉、下町散策、富岡製糸場、川越旧市街、箱根など)
- * 特別講義聴講
- * 日本語クラス(8コマ程度)
- * 新座キャンパスの太刀川記念交流会館に滞在

8

【スライド⑤-9】

観光学部プログラムの日本語クラスの特徴

- * 派遣科目履修生がチューター依頼受け、招聘プログラム内の日本語クラスに出席
- * チューター学生の積極性
- * 相互プログラムであるため日本人チューターを安定的に確保

9

【スライド⑤-10】

課題

- * 日本語クラスの多文化対応
- * マラヤ大日本語クラスでのエピソード
 - ハラルの扱いについて、日本語教師の戸惑い
 - 「あなたは豚肉を食べますか？」という例文を準備
 - 参加者の違和感表明で修正へ

10